





3011
11

特

いろは文庫十二編叙



所稱四十七士は孝大星成を以てめりて
かの寺園ふいてる中ぐは死と亮とを離言と
執りて物のこころに甲乙ありていづれも
其の美をあらはせし中より孝大星成の
法華及僧俗の語終るも善く美名と知ら
ましむるあり又其の孝大星成の法華と

昭和九年
七月十二日
購末

名をいふよるをわぬもいらりむ名新哉
食らんとまゝもまゝもいらりゆれどおほじ
忠死成遂ちあづむむゆゑ英名なり埋
まらん子送懐く終るまわれ一個の
信成考一猶その妻子一換筆のうへよ
世きび強ん思ふ老はあんちる
短き才に長物終只いつのら編教の

岩もよあり哉奈何せんいふせん
今更り止む為事さ終るも
第十ニ編り信成先と

去捨の雪解く解
南庭の梅もぐりて冴る日

為水春百あ紀書



寒助の妻阿冬

中村 寒助 正辰



下奴市助

萩野の 左内



豊成田舎寺とよなりいなかてら
 碁と囲ごを測はからば
 妖怪と砍きる緯いとハ
 本文ほんぶんにらる



岡田かつらぎ
 孫まご大夫たふ
 豊成とよなり

又またに伏ふと子こを
激あと慈母あはれの功いさし
送訓いん、仍なと弥よ
勇ゆう心しん義子ぎしの本ほん性せい



杉すぎ林の
竜平次りゅうへいじ
継房ついでぶら



竜平次りゅうへいじ
母はは

ともか好 達小余未苦方をさせらるで申あいと
獨りて狗を痛めて居るが先刻も助が居る時
教を言さう「ハイ何ぞや」氣が射まう「あんじふ愛さる
て申さる方さう」^左「然らうサ那雷が今夜主をど為て
聖ハ主人小目見をさると言ふのあらん様」^右「い深
らきと出て出て往く管さの小帳をさして別まる時
ホロリと涙をこぼり「あざうと急いであつちを向と教う何
ら」^右「あえん」^右「由合息が往うあいと必のこがイヤ」^右「是由年夢の

僻目々と必ひ持て史ある今秋森席へ運入と処
々頻り小狗さしきがさるの小窓の戸へさうく「聖があり
がる事ダ耳小隣つて空とも寐るまあるうう又必ひ出
あてはくぐくと多助の根子を考へて又さるの小け
途中で急つて時中、零令為果て居る者ダあん平次
切小世話をして呉る者があると言つて然らう也五日の肉
小主取が出来て身のままううまで立派小あうまるか
てもあるまのうう美史秘小世話をする人があつた

あつ 従ひ 考く 病守で 行への 金を 夢ひ 果し
たろ 青葉 小葉を 賣あひて 日何 振う どの 人の 世に
て 自定 とう 空と 辨の 宜い 世渡り 出素 とう ぶりの ぶ
雲を 為 かり かの ぶを ざる ぐ 立派 小あひ かり 由 あん する
迷る とうと 森く しまい 小つけて 必葉を 為て する 小日
外 赤保の 城を 召上 とう とき 時を 少い 徳谷 海人 ぐ 主人
の 能言 針を する 小遠 び どの と言ふ 評判 高く 高の 名を
で 由ひ とうく 用ん ぐ 者 一人 とう 入 咄 とう とう 後 二 向 能

針の 振子 由 あく 流 ぶ 小 命ハ 惜い りの 掃ひ 掃ひ
と 撥 扱け と 悉く 在り 熟 申あつ とう 比 ぶ せん 末
鳴を する りの さく あく あつ 仕 仕 一 辨 那 助 助
其の 宜い 男 とう 何 処 まで 主人の 怨を 報い どの
牙 骨 七 款の 指子 を さぐ らん 小 零 落 とう 辨 小 牙
を 賣の 一 徳い あり 辨 針と 見 指を 為 とう 今 日 帳
む 小 末 どの ぐ あり あり あり あり あり あり あり あり あり
咄 どの ち 小 主 取を 為 とう あり あり あり あり あり あり あり あり



今更
着る
ふ
う

一
二
三

言はまて二個の抱てせしぐ中おのおの涙ぐこ「お
父御さん史が弟一実正あう私し史何根跡しませう
「ハテテ美の史が実正の史あうばけ身い百石に抱へらん
このより様「ハサ」そ公由まアとんど史をな作じやア
ごいませんう美実正で口説トまう「吾助が生場
で切敷さきつ又敷さきあの処クそんお史を為出
さう只で海む史くいごいませうまの婚の命おか
ける史が様「いふお史とどうそを成ふあふらごい生

せん「左」る麻を言ッ「おの右左の二君不事へは負女
お史おまきとむとのいふお女由本が好どうう漢て知
つて居さう「あうごい那男が百石で外の大石へ抱へ
らまるといふのいひ身由本を少いおあがあうく並の
故であいううことを述べるといふ史は出奉る史があ
まの慈らうしく又まばの時まご由嫁人まして居てま
お七由あいううん若しの形りを為て居りまうま
主取まして百石不自由在付とのい結構お史ごて教

ある度と心らまはるるうづつ無いてつらう振ふが初はる
ごらうト件の振抄包を解小なる也
公候令聲のおどろくと云つて封下の為てある物と
あらうて是由然らうであつた時あら致つては據るを物
のあふ海まのどやアごらうはせんり
る遠つてつらうて悪い物をも運入つて居るうは身が
名、助小言状をまするうか冬の速感小由おぬの
構ひ小由ある度ごらうは身小但せと云つて居るハ

才只十三上九

言ひの封をお切つて包に振抄を定まらん
一封の書状あつたのと書小萩左内振中村
多助と認めあるおねとと左内をまらめ女房
由か冬由候小ごらうくのと控との振おの初は
ごらうが安きんハあうけり

第六十八回

「アア史どやア考公の処へ書送しと居る紙を
ごらうのまらう子工何ありあ来く禮を交せて下さる

まゝおののふいせんおごろうとあくと電小気が
んでありませんこつ言あがろ手燭小灯をこめせ
肉は良おの引物より眼鏡を出してかけるるも急
ぐりげ不手紙を字を讀下させ文章書六
一筆中と残しあつまぶ今日神教の砌夫中
の秘更らち昭中とごう候小西玉方の法儀へ
存公候のういぢり中つらひとど申今晩
同盟の老ごもや合せ必死の覚悟仕む由他

笑をね憐りいと由委細み中とまひとの底
意場い推察お下さへき飲只少と筋小思
まいらつ只策最妙の場おをのこねあまの
柄多字ね徳めまうし得せ日比の心懸情と
由報トがう今を山名残とあ成中いけ金子は
おあがろ是まご用急小とてね候く是れど由
おあ子既小とのて入用由山名あくのる拙者
亡びあて冬づ身の左附の助ともり成下させ

く新と存あらたづいし書状あきかた死後あきかた小四こしよ一読ひとよみは下したは
ひさしつり取とりて由よしお百ひゃくと下したづくひふと

ト 養やしやう後ごりあひあつしきども赤あかふさく処ところ不ふあつしきでりし
ゆきまふあつるあどお冬ふゆいりこよりお種たねさくおあつしき
ワットワット通とほせむ左ひだり肉にく由よしほ老おきなの涙なみだせき来るくると春はる
え左ひだりで「おめろく」と泣なみだきるあえお月つき出でるいさむらひ
ぞ「まづて見みぐ泣なみだあので居ゐるまはまめりきを助たすけ
ハ見み惜おしのうへで由よしおませうぐ私わたしあアおろこのん

わ 根ねが可よ憐れんあでありません口くちい立たぬおは作しけまど中ちゆう
あまの由よし泣なみだてお在あるまはまめりきを助たすけ
い 言ことひ身みのいぬ「涙なみだぐらぐらするのぞおを由よし泣なみだあ」ヨおれ
と 年のゆりあひあつるあどお冬ふゆいりこよりお種たねさくおあつしきでりし
り 理ことふらあひあつるあどお冬ふゆいりこよりお種たねさくおあつしきでりし
が 主人しゆじんの款かたを安やす親しんあつておをあつるあどお冬ふゆいりこよりお種たねさくおあつしきでりし
武士ぶしと人ひとふ後ごり指さしをさきまて由よしおませうぐ私わたしあアおろこのん
て 連つ添ぞて居ゐるのが巨おほむく又また先まづ刻とき由よし言ことつとあつるあ



本をあらがひ
 か辨有難くございませうと云うくは返は致しません
 と
 然らういふ良史の了者あう何れうち略て一言でも云
 て破せて呉まうあんざらう私のせう不考ぞうくくといひ
 忠義のこゝろに死小徒くとまうものををを死小止申
 ままの得んをこそこのうぐいせめて別の巻でもう
 交しませうのの小聖の暇に来るあんぞとまざく
 きて往きしめが史が本をあらがひませうといひて又
 伏志づめハハニ并、史の忠義とつゝののく見程の一大事と

ののを親子史辨の中を由口をいって第一その咄が世
 名へ泄して大愛ごうう本をを透るすは史ては外を
 史のと言ふ盟心を立てたては史不遠ひは史の史の
 飯篠不中そんなとがうをうせとあるのうまづし由
 までん残のあいのうふといは書き不おぬの身の在附
 を由きて金まを添て残とて往つこのい余程為ふら
 であらうのふり居いとき助の仕方殊不甘ふお
 史の史を飯小由恨らうい史を思つて海あのと

くおまあさのまート眼のまを替てのらわだ
あはと由周章ての居あいがを帝何をあいて奉るのら
沈是日洗のあいでさうーこのあ
まままをののう向の板紙の産の先一背をさう
そ人教が五十八人おろりト半かづくよりた肉のさつと
あふもぞ「コレ市助をあのやうにさつてい何のまどう供が解ら
あは何の周章あはあいううををあ付てこのらつと吐て皮
せうごまひトさつてあはををあ付て「あは秘あうをろりさつて

お科まをまのまの昨日の夕方まは物のおあを
お中を愛へ住まううお屋も居も必おが雪が溶出てを
いおあのと一をまのて住あうとまはまあが答付でさう
そあは腰が抜け解法をて住まうとあはと月がえて見
るそあうのて居まをうう南をまはまあつてさつてあは
あはて帰りのらと途中小大勢人をさう居て居て款付て
とほお強がらうまをうう何の款付てらうと隠し人の
のをさうと遠るあの人さうの屋敷へ付て款の

江戸
実傳 いろは文庫 卷之三十五

江戸

為永春水著

第六十九回

さのり左内りち若りゆとりおりひり一り咫りへり今り市り助りのり吐りをり吐りてりさりてりわ
をいりくり助りゆりがり首り尾りよりくり本り衣りとり透りくりるりうりとり讀りくりなりり
うれり嬉りしりさりのり花り立りやりうりおり思りふりありぞり 左り 市り助り那り男りのり中り村りをり助り
のとりまりてりけりのり舞りがり塩り谷り家りのり大り衣りんりとりうりうり款りとり
うさり付りうりとりのり計り畧りおり八り百りをりしりまりをり零り落りとり振りをり

大それた疵で由縁にて居るやうな市川下奴も由縁の
へやいあんごう魚ごうけふありて居るううう疵のあり
やせうら何ごの連の疵と完おと笑ひあぐう吐くを
為いゝ歩りッあやう指あが下奴の見負目の
あのが他の疵より勢ひが宜くをえやううう十二
い疵もありやまのい一お爺さん何指紋もせう子
私しやア居るも由縁にて余所あぐうもせう一度
置いとめとせうおまじヨ一あつ秘然うまののり理
あつ秘然うまののり理

極ごうへうら女の星を指を返つて往つと所がはた書
ごのを連中返付まるあゆみ一假令まご返付
てあまるあつ支拂の顔とえ合とらそ処の悪むに
引さきて金珠の中へ小籠かきまうつて居るを
不学の漢で由縁にて中へみぢがあつてい朋寺の
るあで良支お恥をあつて同あ若又涙中を
やうきき母のりあつあぬ一の書と未練な奴ごと
安きげまんせうであらうごのたおねむ性つていを
安きげまんせうであらうごのたおねむ性つていを

お由あうはそこのよく名残が惜まきとて別まらぬ
こののであつたまの實の比身由強まては強めて一十月迄の
とく人でおおぬしのふと由那男お知るせえきりよとて是
きむぐくしてはらあひのけまど中まの役月由といて居る
比身どのお備處指のお名お由かひる女があつては
あひといは身でさへさへて居る比はけう人の良夫の名あは
清すまのとな掛て悲しの所を幸抱せ給ふ武士の書
この言のまぬと辭をそとて論せしなうくおはれ

由強さ生質とそつとる免角まらうちけ強討
の夏世間お笑へて大評判ある秘お又かの下僕市
申のその身の傍病者あまこと強の直お好まあるあや
中奴が所の聲さるで中村を助しあふ人がに十七人の
心で尾お尾とつけを愛中と云ひ觸るまであぞあふ愛
む人ごら申と笑くより家申の面を遊と左内が方へま
りてを胸が身の人のお指あそ尋ね宿ふ由あり又お

知身と持て置しとて養ふ者など多うしる左内門の守之也
鳥居ひつてせり来る人毎ふまをりする格投をうり為す
格不どふま南ふの早捕飛まて客の絶るのつれ
か冬申流石お我が身まをて養ふとやさう路しと不自と
格とをひあしてかしのまをて忘るしとぞ余は時度何
時とあくま君の耳お申入るけんあるとき左内と格さ
せうと那陸若菜の武士の一個中村をぬとのふの空
方の聲あはしかの若公辺のいふはおより思存今のけい

鳥居廿二の中四

あがくし方の縁およりて何年南ふお抱へうと格ひ
とで格うりしは後比十七士の面と切抜作せ付らま
うし餘ふの定を愁傷あうん我の力と格さう格ん
いをぬま書きたとやうん餘が方お在うらふかかお子再
縁の心おあるまが寶の集が書とありと日南おおあ
て投持とあうんあが存元へ召仕ゆるおあひのてお本
あつたしそう方が格の書更ん人の格おあるあう曲
ての身お格をせよとあうらひひあれたる格の作せお

さく老まての事美の名ひと居らうとてけ何れ
我士の沖お仰う由縁ある事ある様と云う事
或まあるて海谷の浪人が白人の故をを殺す
と云つてけ居らうと云う事と云う事
いふ事ある事ある事と云う事
海のとありて見るとは送る事ありて
何れ何れ其の飛は事ありて
と云う事ありて

磨練練育とありて又見ひらの不
身心林方果しお後の中
く現ともありての育自然と現出
花ふとて是ありてその那何れ
て現お夜討と云う事と云う事
月宿と云う事と云う事
い文申お云りての事ある事
が後の固おと云う事

舟の傳終り次の回ありていふ又お徳新不記なり

第七十回

茲小舟堂の一個ある相承に冬と與つる赤條を
退教ある後大星の月堂と受け申す閑承不
り款の座敷小襦をうゝお君所お生町の江廻り小
舟後小切敷の店に申すお方のねんかみおと
あ月と義士の一個なる倉橋全物との念と後小和七と
若せその店のみ代にあり男世帯で暮らすおとみおの

何所中店と守り和七の父老と脊負て高の座敷のと
迎とゆゑとありて賣掛と款の扱ととうとうとどの様
ささづのゆびしおあり日歳比二十八九の艶姿とくく
女が小舟一個と供不運せけ看先へ入来とみおの仕場
う強出して一見の月堂と見入すとの何ぞは
小入申せううお女お定承あるお店の裡と見えし
ヲや今日和七どんのお肩ちえ一今何処うを忍び
トら小舟と和七の横町の井戸より水と一手補綴とあり

唐先ん前小かうをち蒙のこて 三ヤ和七とん六を
か傷とご子 和ら来とのとごうけとん子小園う
振てあを前あいの七中官ひやアあいのえきうよ
まご一の中交と来てうごうとごうて流花と前れ
よの 官ひ子正おとまりして和七の振り返う 和
イヤ是の英考所のお門もえんむひさ小を作よア
ませんう和しやア考らごうか出るさうとごうとごう
砂のまの申う小今あくと前をゆめ二所へ さいおまう

和七十三中十

アしまアあんを味い直なるうりまうてサ悟うのう史の
そうとけるもあ小粒んど物と何及持ッて来ても是
あいのこ、まふうち和七のあを前作舞うて唐へ送入
るあう 和へ那品の前小官の所と切うしきうとごう大
さ小遊ありのりまうし 衛同屋うう和あせまうと何
あう一寸の坊ん小入中せうう 土今日の空とごん
えんて居うとごのこづの直とまのあので持ッて
長なわ下村へ直しての利やうあてあうる月と一



あやアア向て... 吐く
あつに迎へんまうり小登あまうり
君方の子代のことそそ存せりまのり実のことへ
互ひ不朋衆大早夜の内家と受て款の指子とさく
らうとあこおん... 用心厳まく
出入をすぢ申叶ひるのを仇お月日と送るのふあ互ひ不
本意ごあつぢまうり何卒官ひもづる款しあつ
とろ不柄喜ひるの今月の月家えかぬしゆ受ておつて

あつごらう... 西用遠く
そのあつぢ... 死まうり... 那月家えんが後家ぢあつ
う西用と受てお通るのお例まて油のおあまあんぞお
あつごらう... 女とよお入てんみせん... 那を
指子あまて... 同が官く... 那を
の出入の... せぢう... 入を
あつごらう... 恨と... 恨
あつごらう... 恨と... 恨

とんかおが何かおの指子わアおをさるはご子候申
おののあろ病太お喰付れとごらて眼とさる
ていん移人やうふ中居て居やせうがあんち多淫つて
女おひよりと掛り合つてまもて連不惚で體と遊
やうの月お合ふ中初是やせん是をううわア何と申
まご申「コレサおぬー申る麻と云いこのご假令先せん
み淫婦ごらうごま知れは方のう答ふあるぢやう
體に降る秘の支と為あので日さるは先てゆあるしん

お申て申遊ごらうわアあるまううお是とまおをひぢやう
が飲い名おあみ麻申ててんまごらうごま又回の計策ぢやう
ちわアな申るの遠らまの那女ごん生のおるぢやう
あ後家ててまご何申秘の不まうう申て申あるま
うううわア何で申け身の不答お俯くと為させえはぢやう
おぬしとと教ふぢやうのいほおかへ今方の那を女のお入
申申出来うやうおまののどけはまご申て申知が歳のお
所いごうが只一途お申えと遠まご申いと名つてうぢやう

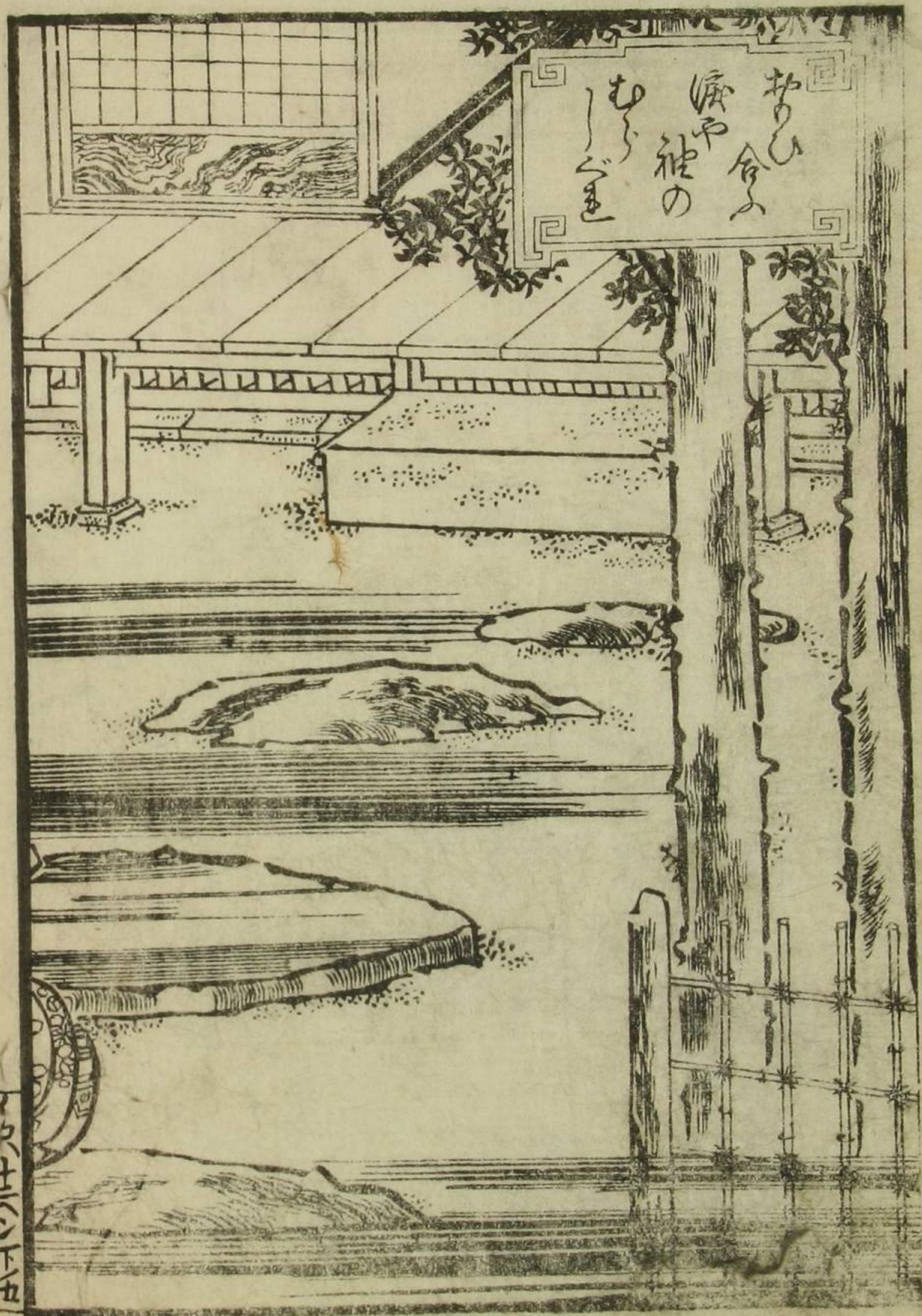
所々子 ふ 舞う サ 那女 ふ 些 と 言つて き うて 用 を あ
 うち あ の と 一筆 書 く う ち 仕 る と 左 へ 飛 て 去 る
 異 み せ ん 和 四 う と か 書 さ み せ ん 私 の 名 を 代 書
 ち の 者 を け と して 荷 が ら 之 を 為 ら ぶ や ア あ り や せ ん
 う と 云 つ 和 七 と 桃 へ の あ と と 自 分 の 手 帳 ふ
 合 せ 七 及 和 成 の 小 切 の 紙 と 行 事 の 裡 へ 入 合 せ
 その 身 由 仕 る ま じ と する う ち お め と 書 か け 一 色 の 手
 紙 と 傳 へ り 一 丈 と わ ア か 世 信 あ ぐ 那 女 お 手 後 一 ふ

五十四年三月廿六日

届 け 代 も 異 み せ ん 一 も ぞ 有 後 で 由 あ つ て 門 に
 飛 移 入 す う あ ゝ と 名 々 用 で 由 あ り う 手 紙 と そ の
 傳 持 つ て 由 に 由 に 合 は せ し 一 丈 假 令 お 客 心 の 通 し 紙
 の 有 後 あ ゝ 呼 出 し 七 手 後 と する う ち お め と 書 か け 一 色 の 手
 出 来 や せ う う ち お 業 と 心 さ の ま ず な 十 云 合 ひ の 手 紙 と
 傳 持 ち て 和 七 の と 一 と 由 り け り
 竹 麩 小 籠 の 何 者 ぞ 其 基 と し 米 の 持 の 業
 仔細 あり 七 細 少 う 浪 速 七 成 最 系 作 の 業

西ま小実こが入いりてお容ようのことを忘わすれしるるのからおお為なす
まのヨよそそて子こ地ちの物ものの月つき小こ懸かると面めん外がいでああるます
「ま実まおおああのい出で深ふか切きいれでもああままああのよハハアアササ余よ斗とあ
まを言いひああので速すみく教しをしておお出でトト脊せ中ちゆうととちちままと
教しく美み似にををままままば小こ雛ひな城じやうととうう小こ実まおおああままああまま
のちくく階か子こををわわららてて性じやうくくまま時とき運うん方ほうのの應おう先せんああるる
生な垣かきの小こ陰かげ小こ思しびびぐぐ和わ七しちいい心こころをを見み出でししりりままぐぐ
一い物ものどどううもも小こ実まままくくままののてて来きまますすぐぐ形かたち丈だけ教しれれんんで

名などどののどどうう何なに振ふる合あ合あををてて呼よぶぶて異いととううあ
物ものどどうう何なにあありり人ひとをを持もつつとといいひひのの心こころのの様よう物ものどどうう
物ものどどうう何なにををままてて飛とぶぶ可かいいのの産うぶままのの極ごく創そううう飛とぶぶ石いし
倍ばいひひ小こ思しびび足あはは小こ雛ひないい心こころをを傾かたむけけてて創そうくくささううあありり小こ
声こゑああてて「わ七しちさんさん包かくく着きてておお異いととううへへ極ごく持もつつままででおお
在あららどどううけけききどどもも何なにおお産うぶままがが和わ一いちととううアアハハアアハハアアハハ
察さつしてて飛とぶぶ身み今いまもも清きよくく極ごく創そううう飛とぶぶ石いし内うち洗せんでで呼よぶぶてて異い
ろと教しれれんんドド丈だけアアままののててけけききどどももああ一いち産うぶままがが外そとへへ



二六二五下五

言はしむるは度ぐあつて困り候へ居る歎ぐらうと云ふ歎ぐ
とんごのつ居ると言ふ所のヨ他の道ももう穿眼をよめる
けむい由おれ一由こんな浮気もあまゝ愛を為て毎日
お容れ出るのいひのをぞんを度をはて居るう知れぬ
トアおれ一言いまして小雛の眼尻の所へあつて居る筋を
出た由口惜らうと思入めて「ヨヤお茶をんもていげ
どあつたまを」私を女のをらう唄女ごころのてお在り今改
て言ふてもあつて互におかふ居る時お見さんぐ私を

お茶をんの所へまらうといふ為にお供があると思ひて
歳のつらあつたお由候へい度ごところのて居るうちも
お容れ那強動ちうぐむらうくおある中おもお茶
と見さんぐ同居お書してお在るものころ私と知らう
候おあつてこの由おのむらうをい縁うと云ふいあつた
度のおつて私きやアお茶をんの女房の気も居る
りのを御も気お酒おまぎらうしてお容の茶ハ程を
せと居るやうおりの使おんぐ候らうり候るまへう

かたがた 涙をたらくしと 溢し せがせと 言ひ
ら私を 僅をうりのお金を頂いとお ありのお 承り
への 裡が ありきと 悲し 再び 例へ 多 添へ 抱き
対んと する 折し 由 誰か 知り 秘と 彼方より エント
声 實 拵ひ 二 個の 怖り 飛 逃して 帳を 書き 言ひ あり
あはと 表へ 別と せける

僕 此 場を 繼ぎ とき 傍 小人 ありて 曰く 此 秘
き あり する 時 本 名 倉 指 全 助 と 喚 び 秘 七 ぞ 侍 たり

く 小 雛の 笑 声 引き きて 涙を 好む 白痴 若
あり 秘 言を 報い 返す ため の せ 見え 来 途
ト 僕 昔 々 然 不 あり せ 義 士 あり べし 本 の 膝
より 彦 且 出 する 者 不 あり せ 人 情 不 後 なら せ
ハ 千 年 万 苦 を 堪 忍 び あり 本 名 倉 指 全 助 哉
うん 奴 人 情 を 知る 者 あり べし 又 笑 聲 の あり べし
素 より 小 雛の 本 名 倉 指 全 助 を せし こと あり
は 本 名 倉 指 全 助 哉 又 笑 聲 不 義 士 の 人 不 あり

あつて互ひおるひおりのまじりてい假令忠義の
 あつてありく難きごころんをせし討入との人
 及ぶて毛糸の念ひおあく必死の覚悟を究めし
 度々の家傳といふべきう程下の段を讀むる非七
 小難が舌をを知らく〇美談かかひ切ると
 猫の急。古人の一句奇なるおト一笑して筆を
 閣く

第七十二回

オロ士六十二

あつて互ひおるひおりのまじりてい假令忠義の
 あつてありく難きごころんをせし討入との人
 及ぶて毛糸の念ひおあく必死の覚悟を究めし
 度々の家傳といふべきう程下の段を讀むる非七
 小難が舌をを知らく〇美談かかひ切ると
 猫の急。古人の一句奇なるおト一笑して筆を
 閣く



松原が去る
と後を傳へ
る事と
甲

あゝうき招ハ事ハ思ハ小由居る一さうへ世の中
廣の指子さうへ何れ由ハ強余へ下ッて居る
人小を付て備由不変ホ度也由あのさう小ホ
せるやうホさうが官ハむけ度ハあて高利屋の内ホ
由肉々會やさうハ状由あううう那人と官ハお談由
度をさうるが官ハ海人サ由け方の在度うう陽月附
を出してあう度ハ大伴考へて承知して居るうう那
方由由の在して居るのけさ由由考根在さうへがえ

度をさうらして居るううさう度ハあて高利屋の内ホ
會めてさうのさ法ハを付けて備一大由を支出源を
在るさうのさ一度のハ度英由下さるのさうさ由
ふおとさ作付らささうさうが定めて考女のお手紙小由
私の新へのおおホサハあつて一人度ハさ場
公ておさうささうの在る「何卒背尾ようつんけ
出してさうさうハ度英由小ホさうさうのさ由
う度女ハ何れも官ハおんさうり由由さういささう「私由

まごもそとつんぬらまもまのダ子 女の抱智友のやうど
けとども今お言ひの大早とつんぬ人が内ふ小んを海へ
寄があらううまも知とあへううお居安ううも大助を
かをして隠し 同附申出てあううごらとども私いま
使ううまとまへして大星の招子を探して呉るやう小と
と方のふ易い人の所へ内々斬んであつておるま由あは
又様余小来て居る浪人共小由若也とつんぬ人共
このまへて由あへうう何あつて由私ダ見留とらゆら

あつらうま小お前不知らせるううかお由ん付とらゆ由
お在るう私おね候をうてお是也然らままはばお互
ひ小四夜寝が頂うまると言ふのござう 一うう秘見
いんお吐くまごいませを何まさるの由お角丸平の
お小返入るまを先く考へて掛あのダ妻世でござる
ませう。イヤまおまごやうひらの友伴さなうう由傳
言のあつこのを忘まて居るまへ 昨晩阿波長と
やうの二階でお吐くあつこ小籠とらうの唄女のまは

何指うはとも速く度の日もさうお為らぬのさうさ
精うでぬのか其なるさう不然らまうして其うと
お作まうと「ア、い、史由ん波て居まをさうかお又
お屋敷へお出あうのさう私に松末さぬとて
何うのお返りいさうしあげせうと言つてさうして
お兵まト出の抄さう勝手さう召使の小女が出
来り「お内美さんア、切屋の和七さんご四段文のお
を指つて来りまうと言つて来りまうヨ「ラヤ然らう

侍うて居る所さう遠方へもさうト言ひまて
のト言あう小女を例へて考せ耳の側へ口を考せ
何うこそ「言付まは「バ、い、思ひまうとて往く
「お容さぬさう私にさうか惟不致しませう「オ、お
容さぬいあの子「お由のさうの體をむごふ引向ら
さう迷思をお為さうさう侍さ小お帰りヨか
いづれは速くおお候を爲せう「「イ、左指さう何か
さうかおひまうしまをトさう「「みで立帰る

い
ち
く
早
あ
ら
ん
と
め
お
よ
い
う
遠
つ
て
来
り
か
の
和
七
が
ち
蒙
ふ
對
面
の
多
き
不
及
び
ま
あ
り
ま
す
と
又
い
う
あ
る
物
強
り
あ
る
丹
ハ
十
三
編
の
末
に
め
お
繼
ら
ん

あ
ん
せ
の
ち
よ
の
り
づ
え
五
編
より
為
永
春
水
著
追
々
出
板

あ
ん
せ
の
ち
よ
の
り
づ
え
五
編
より
為
永
春
水
著
追
々
出
板
あ
ん
せ
の
ち
よ
の
り
づ
え
五
編
より
為
永
春
水
著
追
々
出
板
あ
ん
せ
の
ち
よ
の
り
づ
え
五
編
より
為
永
春
水
著
追
々
出
板

正史
実傳
いろは文庫卷之三十六

六十五下大

